西遊夢錄（二十三）

瀧川規一

蘇國の部

［アイオーナの島］ アイオーナの島は海港オーバンから半日の航程である。島名はアイオーナ（Iona）又はアイコームキル（Icolmkill）と云ふ。ヘブリヂス（Hebrides）の島と云へば詩に歌に、歌はれ傳説戯曲に材料となり荒寥神秘なロマンチツクな夢幻境を常に連想せしめる。そのうちにも名高いアイオーナの孤島に今は足跡を留めて居るのである。十八世紀に英文壇の權威であつたジョンソン博士とボズッエルとがこの聖島に訪れた時博士が「アイオーナの廢墟に訪れながら敬虔の念の熱し來らぬ人間は羨やむに足らぬ」と云つた話は有名な話である。最近では戯曲家バリ（Barrie）はヘブリヂスの一孤島に材料を藉り脚本メリ、ローズ（Mary Rose）によつて幾多の觀客に涙を流さしめたことは現筆者が目擊した一經驗であつた。

アイオーナの孤島は太西洋の波濤に洗はれ海拔高からず一見丘陵の島としか見えない。僅か一哩餘の、アイオーナ海峽（The Sound of Iona）を隔てて東北にムル（Mull）の島がある。海岸近くの草原には屋根落ち壁崩れた僧院の廢墟が潮風を浴びて物寂しげに聳え立つて居る。綠青に茂る雜草の間には扁平な墓石が幾個も雨露に曝らされて居る。蘇格蘭や愛蘭の往昔の諸王豪雄が靜に永遠の睡眠を續けて居るのである

海岸近くにはジョンソン博士の時とは異りお粗末な旅宿が二軒ある。傍に道路を挾んで賣店がある。島に因んで製作された種々な土產物を賣つて居る。食料品を鬻ぐ店もある。島の娘達は僧院跡を巡拜してゐる間に體格の大きなのも小さいのも容貌の美しいのも美しくないのも異國人を見物せんと物珍らしげに集つて來る。そのうち一人の娘の語るによればオーバン港には只一人の日本婦人が居る。船員の妻君で親切な老婦人であると云ふ。

娘は詞を續け「訪問して見たか、未だならば訪問して見よ」と薦める。他の一人の娘は「早くホテルに來れ、泊れば色々な話をして上げる」と云ふ。話は遡るが倫敦に初めて着いて間も無い頃一夕ハイデ・パークを散歩して居た。一人の婦人が物優しげに聲を掛け「向ふに可白い活動寫眞がある。見せてやるから一緒に來い」とすゝめた。生憎其時は活動に興味をもたなかつたので折角の好意を仇にした。同じくハイデ、

バークで或時「今迄泊つて居つた日本の海軍將校が歸國したので淋しくなつたから是非妾の家に來て下宿せよ。宿所は此處である」とて曰說かれ、その時書いて與れて紙片を途中損失さしたので後に訪れることが出來なくなつた。

友人にそのことを話すと友人は枯骨寒巖の無粹を冷笑した今またアイオーナの聖島で嬢子連に投宿を勸誘される。處は夢幻の境へブリヂスの孤島である。倫敦は繁華な巷とは全く違つて居る。然し嬢子の勸誘は危險であると思つたので、只一言「否」と答へた。島の娘は怪訝な顏をしながら「それでは船の切符を見せよ」と云ふ。云はるるままに切符を見せると驚いたことにはその切符には二泊の宿賃を拂つたことになつてある。而かも宿の名まで指定してある。オーバンの宿の者にアイオーナの聖跡を見物することを話し切符を求めさした時に間違つたものらしい。それに加ふるに生嚙りのゲーリツク語研究熱が誤解を招いたらしい。娘はそれ見よと云はん許りの顏を振り上げて笑つて居る。やがて手を取らんばかりにして宿に連れ行く。船は歸客を載せてオーバン港指して出航する取り殘された心のうら淋しさよ離れ小島の物寂しさとが胸にひし〳〵と迫つて來る。鬼界ヶ島の俊寛以上である。宿に着くと戸口で云つた娘の云ひ草が氣に喰はぬ「今迄に見たこともないやうな最大臆病者を連れて來たよ」と帳場の者に紹介するのである。

夕食後宿の娘や小僧等と共に島の最高地點まで散歩に出かける。綠草の原は島の端から端まで蔽うて居る。草原を超えると太西洋の碧青の波が無限に連つて水平線を劃して居る。北國の空には珍らしく夕陽が輝いて居る。數時間に亘るながい黃昏時が來る。偉大なる極光に似たる光彩が物凄じい程に美しく見える。物悲しげな廢墟の壁ばかなたの草原の上に陰影をながく曳いて居る。握る手の二人の娘は脈搏を不整に打たして居る。蘇語ゲ語英語が混入して意志の疏通を缺くこと夥しい。大自然の美觀とロマンチツクなヘブリヂスの島とを現實に見ながら何故かこれを充分賞鑑する心の落着を感じない。二泊はどうしてもしなければならぬ。船は隔日にオーバンから來る許りである。今更焦つても甲斐がない。兎も角も悠然たる心構へを自らに强ひなければならぬ。斯くて晝間は或は濱傳ひに散步をし。或は聖跡を心ゆくまで再三訪れて時を過し夜は宿の者を相手にゲーリツク語の歌の讀み方や聖コロンバの有難い話を聞いて島の二泊を終つた。

【聖コロンバ】 アイオーナの孤島に僧院の殘骸を遺して千四百年の後に至るまで心あるものの訪れを絕えず受けて居る聖コロンバ (St. Columba) その人は抑も如何なる人であつたか何の事業にせよその開拓者は必ずどこかに偉いところを有つて居た。

聖コロンバにも必ずさうした處があつたに相違ない。彼は愛蘭名族の裔である。彼は愛蘭のドネガル (Donegal) の畫猶物闇い森のうちに生れた。森林中には三つの小湖があり繁茂せる樹木の爲めに水色亦黑ずんで居る。聖コロンバの時代には狼群が常に森林に彷徨いて居た。水邊近き森陰に一枚の平

石がある。聖コロンバはこの石板を産褥として孤々の辭を擧げた。時は紀元五百二十一年である。今年に至るまでこの一枚の扁石には多くの巡禮者が來る。彼等は石に靈驗があることを信じて居る。撫で觸はると婦人等は安産をなし得ると信じ海外に移民となつて行く者等は望郷病が治癒されると云ふ聖コロンバは當時蒙族の子弟が養育された習慣に從つて宗教界に身を投じ諸處の名僧知識の許に研鑽を積んだ。宗教界に入つて以來或は豫言的な啓示を得、或は奇蹟を表はし或は天使の幻影を屢見た。娘を殺した者に向つて只一言激怒の聲を發したが爲めに殺人者は立處に死んだとさへ誠しやかに傳へられて居る。

アイオーナの聖地に渡つてピクト族に教化を垂れた以前に既に愛蘭には幾多の僧院を創始して居つた。彼が聖島に渡來した前後を通じて彼の統率の下に三十七個と云ふ多數の僧院がある。彼の教化の偉大であつたことを想像せしめるに充分である。聖島アイオーナに於ける彼の風貌と日常の坐臥とは如何なるものであつたか。人間界の一人としての聖コロンバに寧ろ興味がある。彼は背が高く眼光射るが如く鋭くあつた常に前頭部を剃髮してゐた半坊主であつた。身には粗布製の袈裟を着け、頭には羊毛の手織頭巾を冠つて居る。直接肌にはリンネルの襯衣を着てゐる。リンネルの襯衣と云へば絹物に等しく三越や大丸ではシヤツ中の高價品である。コロンバの着たものは果してそんなものであつたらうか今日知る術がない。足には草履を穿いて居る。常に着のみ着の儘にて扁平なる石の上に睡眠をとつて居た。石の褥石の枕の難業だと思ふと有難い感がする。

晝間は森林の陰に祈禱をなし夜に入つては物靜な場處を撰んで祈に時を過ごす。一日を送るに三則を以てした。祈禱と勞働と聖經の淨寫とがその三つの仕事である。海洋の波濤が虛空に轟かす唸の音を耳にしてはこれを靈交の手蔓と解し、靄霧が荒野にさ渡り襲ふも迅く消ゆるも速い有樣を見ては天啓の所緣と心得た。時々對岸の北蘇國に渡つてピクトの蠻族を教化し改宗せしめて基督教の文化を蘇國及び北英に普及せしめんと圖つた。信仰人の常行である救貧癒病は彼にも亦教化の方便であつた。沈默の修業を積み殉教の苦に甘んじた。服從と從順とを教へ隱遁の生活を撰み清貧を守つた。聽けば聽く程何事も有難づくめである。彼が僧院に長たることを得たのは院主に對して教業の人々の絶對の服從をもつてしたことと、教法の修業には實踐の指導を以てしたこととが與つて力があつた。

さて宗教の如何なる種類を問はず往昔世界の到る處に名僧知識が多く居つた。また殉教者や豫言者は群を成す程に數が多くあつた。數多き彼等がその德行なりとして擧示する處を見るに何れも大同小異であつて軌を一にして居る。彼等の生涯を總括すれば豫言と奇蹟、難行と教化の四つである。有り難づくめの高僧談を聞く時に常に感ずることではあるが、斯うした時平凡なる通俗人が心掛一つで出來るやうな實行の可能な難行談が却つて有難味を感ずる。

吾々平凡人はそれによつて實際的な價値を感ずるのである奇蹟談を聞いてもさうである奇蹟談の連發は却つて奇蹟に非らずして奇怪談となる。人事を盡した行き詰りに漸く現るゝ奇蹟こそ無限の意義を見出すのである。斯う考へると複雜な神學や哲理はまた机上の空論に等しくなる。聖者の平凡なる日常の所作が却つて眞意義をもつ。聖コロンバは日常馬を愛した。馬は聖者の姿を見るとその袖に馬首を垂れ輕く叩いて聖者の祝福を乞ふが如き樣子を見せたと云ふ。聖者の食事と云へば生ぐさものを斷つたやうに聞えるが、聖コロンバの日常の食事はさうではなかつた。佛教でないから菜食主義は教道の一に入らなかつた、只妻帶を禁じた點が佛耶僧院の共通點であつた。コロンバは日常パンと牛乳、肴に鷄卵及び海豹の肉をとつた。宴會などの時には牛肉や羊肉を用ゐた。吾々にとつて聖コロンバは中々の珍食家である。此處のホテルの食事と大差が無い。而かも海豹の肉などは珍中の珍料理であつて濠歐中何れのホテルに求めてもこれを得ることが出來なかつた。こんな話を聞くと聖者にも人間味が增えて來る。屋根は落ち壁は崩れて居てもありし昔を想像して聖者が日常坐臥を彷彿せしめる。黃昏時四圍の見物が愈が上に靜寂を增す時僧院の礎石や石柱の遺物扱ては半崩れの壁の間を只獨り默々として歩を運ぶ身には自ら聖者の心境を捉へ得たかの如き感がする。中央の禮拜堂の祭壇前に佇む時は宿の者から聞いた聖者の臨終の光景が實見するが如くに偲ばれる。聖コロンバの臨終の話は次のやうである。聖者は死期の近いてゐることを覺えたので、例の如く石の褥石の枕に身を横へて修業僧等の祝福の祈を低聲に唱へた。その聲の低さは只侍者にのみ聞える程度の力弱き聲であつた。やがて拂曉になり未だ世は薄暗である。いつもの如く朝の祈の鐘の音が響いて來た。病臥のコロンバは突然立ち上り禮拜堂を目指して急いで行つた侍者は聖者の後を追うて行く。禮拜堂内は未だ暗黑である。祭壇に近づくとコロンバは一聲高く「父よ汝は何處にありや」と云つた。やがて信者達は提灯を携へて禮拜に集つて來た。見ると院主コロンバが祭壇前に倒れて居る。驚いて一同の中の主席がコロンバの頭を腕に支へ聖體を抱き上げた。この時既に一同は聖者に臨終の迫つて居ることを悟つた。一同は泣き悲んで居る。その時コロンバは兩眼を瞠と開き顏には微笑を嬉しげに漂へて左右の者等を見た。彼は臨終の眼に恰も天使降臨を見た時の如く高く右手を差し上げて集れる人々に祝福をした。然し既に口は利けなくなつて居た。而して徐ろに彼は天界の人となつた。彼の遺骸はアイオーナの島に一旦葬られ一世紀後に發掘され祠堂に祭られた。その後十二世紀に至つて聖骸は愛蘭に運び去られたが今日では全く行衛不明である。生者必滅會者定離ではあるが聖者必滅ではあるまい嗚呼！

聖者コロンバは北英文化の歷史に歷然たる感化の跡を濟してゐる。アイオーナの僧院を一つの傳道學校若くは傳教大學とすれば、彼の遺鉢を嗣いだ弟子等が彼の後に普及せしめた教化を史實の上に考へ、殊に北英の文化の源泉をなし、遠く

は獨乙、墺國及び、瑞西に及んで或は極東國にまで及した基督教の偉大なる傳道とその力を考へる時、フランシス・ザビエルその他極東傳道者の名を想起すると共に聖コロンバに遡らざるを得ないのである。自己の不注意に因し島の娘にほだされた二泊が豫期せざる靈驗を得た。

〔アイオーナの十字標柱〕 英蘇愛の諸島を通じて大小の都會には必ず十字標柱がある。その數を總計する時は恐らく幾千と云ふ多數に上るであらう。然し完全に保存されてゐるものは至つて尠い。異國旅客は倫敦のハイデ・パークに隣接するケンシングトン・ガーヂンに建てられてあるアルバト紀念塔を見、その礎石に並べる先哲偉人の像に好奇の眼を向けた後その建築の形式の由來を聞く時考古的興味を喚起される。古本を漁る者等がお百度を踏むチヤリング・クロス街の町名の起源である十字標柱が稍もすれば見逃し易い處に完全に保存されて居るのを見、その由來を教へられて亦歴史的興味を覺えるのである。今アイオーナ島の僧院跡に建つてゐる十字標柱が各地にある幾多の標柱とは趣を異にし古雅掬す可きものあるを悟り一見其印象の拭ひ去り得ざることを感ずる。十字標柱或は墓地に或は都會の町辻に或は野畑のうちに悄然物淋しく立つて居るのを見て何の爲めにそんなものが建てられてあるかに疑問を抱く。

抑も十字標柱(Cross)と云へば誰しも考へるが如く基督が磔にされた十字架を象徴して作られたものであるが、實際の標柱を見ると變形に變形が生じてゐるので説明を聞いてはじめてそれだと頷かれる程なものもある形式に於て種々變化があると同じくその建立の目的に於ても種々雑多である。第一純然たる記念の目的にて建てられた記念塔がある。記念するに値する人物を記念することもあれば、一大事件の發生を記念することもある。動物保護の目的にて殺生禁斷の地を標示する爲めに建てられたのもある。罪人すら十字標柱下に立つが爲めに捕縛を免れた例すらもある。泉を湧出せし井戸のあることを示すが爲めに建てられたのもある。以上は何れも記念塔の部類に屬するものである。次は境界標として建てられたのがある。村と村、教區と教區、莊園と莊園との境を標示するのがそれである。

新刊紹介

○人文地理學

ジャンブリュンヌ著　松尾俊郎抄譯

古今書院發行　六月十四日　定價四圓二十錢

本書は有名な佛國の人文地理學者ブリュンヌの、英譯から抄錄したものであるから、重譯といふ最初からの惱みがある日本人にはあまり重要でなからうといふので、自然區域の特殊研究に關する第六章の沙漠の島と、第七章の高山の島とを割愛されたといふのである。しかし地理學の本質論や人文地理學の主要事業などの箇所は出來る限り忠實に譯出されてゐるといふことである。書窓忽卒の間ゆつくり原書と照合して